

「2023年度ベトナム国家大学ハノイ校スプリングスクール派遣参加報告書」

京都大学教育学部1年 出口 菜都子

今回のスプリングスクールに参加する前、恥ずかしながら私はベトナムについての知識が非常に乏しい状態だった。ただ、母がベトナムと共同事業を行う会社に勤めており、母からベトナム人の仕事の丁寧さや英語能力の高さ、計画性や協調性の高さを聞かされていたため、ベトナムに対してはポジティブなイメージを持っていた。しかし、発展途上の国であることからその衛生環境や治安はある程度悪いことを覚悟してベトナムに向かった。いい意味でも悪い意味でも、派遣前と後で先に述べたイメージは根本的に変化しなかった。しかし、ベトナムという国が私にとって日本の次に特別で思い入れのある国になったと同時に間違いなく今回の派遣が自分の価値観を大きく変えてくれたと感じる。

・大学での学習について

最も印象的だったのはやはり、後半の ULIS で行われたベトナム語講座である。日本では絶対に体験できないような、ネイティブにマンツーマンで教えてもらえる授業形式で、非常に貴重な体験ができた。ベトナム語は、日本人の私からすれば正直違いがわからないほどの、細かい発音の規則がある。何度も何度も練習をしたが、結局最後まで理解できなかった。日本語が世界で1番難しいと思っていたが、それ以上に難しく感じる言語には初めて出会った。しかし、現地の学生さんの日本語とベトナム語での会話を比較すると、やはり母国語の方が自分の意思を正確に伝えられていることが表情や声の調子で分かった。自分はベトナム語がほとんど話せないけれども、他の言語を学ぶことはコミュニケーションをとれる相手を増やすだけではなく、相手をどれだけ深く理解できるかにも関わってくるのだという気づきを得られたし、今後の外国語学習のモチベーションにもつながった。

・海外での経験

ベトナムでは、挙げだしたらきりがないほどたくさんの貴重な体験ができた。しかし、全てを通して実感したのはベトナムの人たちの心の温かさである。特に、今回交流をしたベトナム国家大学の日本語専攻の学生さんたちは、私たちがやってみたいこと、食べてみたいものを聞き出して、私たちが思う存分楽しめるように、最善の選択をできるように、精一杯サポートしてくれた。普通、誰かをもてなすときには少なからず自分の事情や希望も考えてしまうと思うが、彼女たちは自分たちのことは二の次にして、私たちの面倒をみてくれた。お金がないのに、私たちをあちこち連れ回してくれたり、自分が買うわけではないのお土産を買いのように市場に連れ出してくれたり、大変お世話になった。これまでの自分は、本当に自分勝手に、自分軸で生きることが自分の幸せにつながるものだと思っていた。だから、100%自分の利益にならないものに対してネガティブな感情を持ってしまっていた。しかし、ベトナムの学生さんが、貧しくてもとても生き生きと幸せに生きているように見え、心が洗われた。このような他人のためを考える行動規範は、やはり社会主義国家ベトナム特有の教育方法に養われたものなのかもしれないが、自分もベトナムの学生さんたちのように、もっと他人を思いやって、他人の幸せに対して自分も幸せを感じられる人間になろうと思った。

次は負の側面についてだが、事前に覚悟していた通り、衛生環境はひどいものだった。トイレは嫌なおいがするし、道端に生ゴミやプラスチックがたくさん落ちていて川では死んだ魚が浮いていた上に、空気も排気ガスで霞が立ったように濁っていた。飲食店も、排水をそのまま道路に流したり、食べ物に虫がたかっていたりと汚い印象を受けた。自分は旅行中に体調を崩すことはなかったが、一緒に派遣に参加したメンバーの数人はお腹を壊していた。学生に聞いたところ、バイクは自動車のように税金がかからないことから、日本で言う自転車のように簡単な移動手段のひとつであるらしい。そのため、学生は1人1台バイクを所有することが当たり前だそう。ベトナムは、日本に比べて若者や子供の割合が圧倒的に多かったため、今後こういった社会問題は何か改善

策を取らない限り、ますます悪化していくと思われる。日本を出て初めて、劣悪な衛生環境を目の当たりにして、地球の将来に対して、初めてこれほどのリアルな危機感を持った。

・プログラム内容について

共同発表について。ULIS と USSH と京大で情報共有が十分に行われていたか行われていなかったかは分からないが、現地の大学の先生から共同発表についての説明はおろか、共同発表があるということ自体にも聞かされなかったため、不安な状態だった。後半の ULIS では授業で発表の準備時間が充てられていたため、準備はなんとか間に合ったが、最初の 1 週間、USSH にいる間は全く準備が進んでいなかった。その結果、2 週間目になってわざわざ USSH の学生さんが ULIS の近くまで来て準備を進めることが続いたので、もう少し効率よく準備ができるように次回以降工夫することが必要であると感じる。また、今回の派遣では事前の説明があまりないことに不安を感じる事が何度かあった。例えば、ULIS で学生経由でパスポートの写真提出を依頼されたことがある。学生さんの日本語能力が十分でないと誤解を生みやすい上に、そういった重要な個人情報を取り扱う内容は先生からの直接的な説明が必要であるように感じた。授業でも習ったがベトナムと日本では、知的財産権や個人情報保護が日本よりも厳格に規定されていないため、その点は留意すべきだと思う。USSH と ULIS を比較して、大学ごとに生徒さんの雰囲気や一定の共通点を感じたため、興味深かった。USSH の学生は、同い年や年上のはずなのになぜか幼く見えた。学生同士が非常に親密で、私たちとも積極的に関わって、たくさんもてなしてくれた。多くの学生は裕福ではなく、節約して生活している印象があった。こちらの大学は、社会主義的な性質を持っているような印象を受けた。対して ULIS の学生さんは、都会的でおしゃやれで大人っぽい印象があった。学生はひとりや 2 人組でいることが多い。留学を控えている生徒も多く、身なりや所有しているバイクの立派さから、裕福な学生が多いように感じた。しかし、ULIS の学生は USSH の学生と比べると私たちとの関わりは授業以外にはあまりなく、スケジュールの合う人 2、3 人と放課後に遊びに出かけたりといった感じで資本主義的な性質を感じた。どちらにもそれぞれの良さがあり、普通に旅行に行くだけでは体験できない、貴重な体験がたくさんできて、プログラムには非常に満足している。

・進路について

自分は、公認心理士の資格をとって心理的なサポートをする仕事に就きたいと思っていたが、その気持ちますます強くなった。現地の学生で、日本人の自殺率の高さに関心を持っている学生がいた。ベトナムでは、時間外労働がほぼなく、早起きして、仕事をして夕方バイクで渋滞に巻き込まれながら帰るといのが日常だそうだ。彼女によると、ベトナム人は日本人よりもストレスフリーに生きているそうだ。私自身も日本人に比べてベトナムの方が自分をはっきりと主張するようになった。ライフスタイルや、社会システムがこうした違いに起因しているのだろうが、今回の派遣を通して、より、日本人の性格やそれを構成する外的要因への関心が強まった。2 回生以降は、心理学の専門授業が増えていくので、日本国外と比較する視点も大切にしながら研究に励もうと思う。